

□原著論文□

児童自立支援入所児童と一般中学生のソーシャルサポートと 向社会的行動の関連性

竹内 瑠美* 小島 秀吾**

抄 録

本研究では、非行少年の問題行動の低減に対して心理的アプローチを模索するために彼らのソーシャルサポートに着目し、向社会的行動との関連を明らかにすることを目的とした。方法は、対象を関東圏内にある児童自立支援施設入所児童38名中有効回答数29名(入所群)と東京都内の某公立一般中学生男子42名中有効回答数40名(対照群)とし、ソーシャルサポート尺度と社会的行動尺度の調査を実施し分析を行った。その結果、入所群の方が対照群に比べソーシャルサポート尺度の得点が高かったが、向社会的行動尺度の得点の有意差は示されなかった。また、両群において回帰分析を行った結果、一般中学生ではソーシャルサポートを高く感じているものは向社会的行動をより多く行うという関連がみられたが、児童自立支援施設入所児童ではソーシャルサポートの高さと向社会的行動の多さにそのような比例的関連性はみられなかった。一般中学生ではソーシャルサポートが強くなると反社会的行動が低減することが知られているが、入所児童の反社会的行動の低減に向けてはソーシャルサポート強化以外の視点が必要と思われた。

キーワード：児童自立支援施設，中学生，反社会的行動，向社会的行動，ソーシャルサポート

The relationship between prosocial behavior and social support with children of child self-support facilities and junior high school students

TAKEUCHI Rumi and OBATA Shugo

Abstract

The objective of this study was to explore the relationship between social support and prosocial behavior for the reduction of problem behaviors among juvenile delinquents. The survey was conducted with 38 children of child self-support facilities (29 valid respondents from the facility group) and 42 junior high school students (40 valid respondents from the control group), who were analyzed to examine factors related to the social support scale and the prosocial behavior scale. Results showed that the social support score of the facility group was higher than the control group, although the prosocial behavior score did not show a significant difference. Next, the results of the regression analyses showed that the student who feels a high level of social support in junior high school exhibited more prosocial behavior, although such proportional relevance was not found in children of child self-support facilities. Although it has been shown that antisocial behavior found in the typical junior high school student will decrease if social support is felt, for a decrease in antisocial behavior in children of child self-support facilities to occur, it was considered that feeling social support is unnecessary.

Keywords: child self-support facilities, junior high school students, antisocial behavior, prosocial behavior, social support

受付日：2012年5月2日 受理日：2012年12月5日

*国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健医療学専攻 医療福祉心理学分野 博士課程
Division of Health Welfare Psychology, Doctoral Program in Health Sciences, Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare Graduate School.
E-mail: chibi_chibi_23@yahoo.co.jp

**国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻
Division of Clinical Psychology, Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare Graduate School.

I. はじめに

平成23年度警視庁より発表された非行少年の概要では、刑法犯少年の検挙人員は8年連続の減少となっている。しかし、刑法犯少年の人口比は引き続き成人の約5倍に上り、再犯者率の上昇、低年齢化の進展等の状況が認められており¹⁾、少年の非行防止、保護の両面において予断を許さない状況にあると指摘されている。非行少年とは、少年法第3条において、罪を犯した少年(犯罪少年)、14歳に満たないで刑罰法令に触れる行為をした少年(触法少年)、保護者の正当な監督に服しない性癖などの事由があつて、その性格又は環境に照して、将来、罪を犯し、又は刑罰法令に触れる行為をするおそれのある少年(ぐ犯少年)とされている。このような非行行為から施設入所に至る児童もいる。その更生施設として、児童自立支援施設がある。

児童自立支援施設とは、「不良行為をなし、又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ、又は保護者の下から通わせて、個々の児童の状況に応じて必要な指導を行い、その自立を支援し、あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設とする」(児童福祉法 第44条)とされている。更生方法として様々な取り組みがなされているが、施設職員に対する暴言・暴力が続く者や、施設退所後も同じような非行行為を繰り返す児童もいる²⁾。非行行為は反社会的行動とも位置付けられ、問題行動として指摘されている^{3,4)}。2005年7月から始まった「児童自立支援施設のあり方に関する研究会」では検討課題の1つとして施設援助技術・援助方法の向上と研修システム・人材養成が上げられた⁵⁾。虐待の増大と共に質的な問題が深刻化してきているなか、対人関係がうまく取れない、感情的な爆発を起こして自己抑制ができない児童が年々増加し、なんらかな精神的な問題を抱えた児童の増加により、日常的な援助の困難性に加えて、施設職員の人材の育成が急務と言われている⁶⁾。施設に入所にしても尚、問題行動を繰り返す児童がいるなか、この問題行動に対処するためにはどうしたらよいか。

児童自立支援施設の入所児が問題を起こす背景には、家庭環境や情緒面の不安定さ、大人不信に陥っているなど生活上の課題を抱えた子どもが入所してきている事が挙げられている⁷⁾。児童自立支援施設入所児童を対象とした研究において、親と一緒に暮らしていても、児童から見ると不十分なケアしか受けておらず、そのために具体的な生活場面においての不満が多くあがっており、その保護者が十分に機能できない中で、児童にとって学校の先生や施設の先生の存在は大きく、家族以上に頼りにされていることを明らかにしている⁸⁾。このことに関連して、親との間に情緒的な関係をもっていることが問題行動に対し抑制効果をもつこと⁷⁾、ストレスの大きい状況に有る10歳の子ども(片親が精神的な病気で治療を受けている子どもや、両親が不仲な子ども)を対象として研究では、少なくとも片親からのサポートが強ければ、ソーシャルサポートのない子どもよりも問題が少ない事なども報告されている⁸⁾。ここで、ソーシャルサポートは、「他者から愛され、尊敬され、価値がある存在としてみなされていること、互いに義務を分担しているなどの認知」と定義されている⁹⁾。また、中学生では、教師からのソーシャルサポートが高いと飲酒、喫煙の問題行動が低いことが示唆されている^{10,11)}。これらの研究から周囲との関わりや情緒的關係、特にソーシャルサポートの高さが問題行動低減に関連することが予測される。そうであるならば入所児の問題軽減には、ソーシャルサポートを高めることが有効なのだろうか。ただし、非行少年の心理をテーマとした場合、問題行動の有無を問うことや、問題行動にいたる理由を問うというような場合には、対象者に負担をかける可能性や本心からの回答が得がたい可能性があることが容易に想像される。そこで向社会的行動という行動に注目した。

非行行為及び反社会的行動の反対側に位置づけられる行動として向社会的行動がある。向社会的行動とは「外的な報酬や返礼を期待することなしに、自発的に行われ、他者を援助しようとしたり、その利益になることをする行為」である¹²⁾。非行・犯罪研究と向社会的行動研究の接点としては議論がなされており¹³⁾、

臨床の視点として、反社会的行動を減らすことに注目することより、向社会的行動を増加させることが、反社会的行動の低減に繋がり、矯正や更生の一助となるかもしれないことが検討されている。

だがそのことに関する研究の報告はわが国では少ない。中川ら¹⁴⁾の大学生を対象にした研究では、仲間からの拒絶反応が少ないと捉えている回答者の方が不良行為に関与する頻度が高かった。これは、不良行為や非行は単独よりも仲間と一緒にやる特徴¹⁵⁾があることから、仲間からの拒絶反応が高い少年は、一人で行動する機会が多く集団性が高い非行や不良行為に関与する機会が少なかったのではないかと指摘している。一方、仲間からの拒絶反応と向社会的行動との関連は見られなかったとされる。尾関ら¹⁶⁾は中学生による向社会的行動と迷惑行為に着目した研究において、地域社会に対する愛着が強い子どもは向社会的行動をとりやすく、迷惑行為を行いくいことを示唆している。以上のように仲間関係や地域社会との関係など周囲との関わりから不良行為及び迷惑行為の高低や向社会的行動との関連を指摘する報告は少数あるのみである。

ソーシャルサポートと向社会的行動の関連では、小学校1年生から5年生の児童を対象にソーシャルサポートを高く認知している子どもの方が向社会的性が高いことを明らかにしている研究がある^{17,18)}。

それでは、非行少年と同年齢にあたる一般中学生の場合もソーシャルサポートと向社会的行動は関連が見られるのであろうか。そして児童自立支援施設の入所児童たちのソーシャルサポートと向社会的行動には関連が見られるのであろうか。そのようにソーシャルサポートの高さが向社会的行動を促すのかについて一般中学生と児童自立支援施設入所児童との両者を対象とした調査は今のところ見られない。

そこで本研究では、一般中学生と児童自立支援施設入所児童のソーシャルサポートと向社会的行動とを比較し、さらに両群のソーシャルサポートの高さが向社会的行動に関連しているのか検討した。

II. 方法

1. 調査対象と方法

本調査の対象は、関東圏内にある児童自立支援施設(小舎夫婦制)の入所児童男児38名(入所群)と東京都某公立中学校一般中学生男子42名(対照群)、有効回答数40名である。児童自立支援施設に訪問し、施設長及び施設職員(勤務医、寮長・寮母ら)に口頭と書面にて調査の概要について説明を行い、了承を得てから、同施設の38名の入所児童に質問紙調査を実施した。38名中、回答を得られたのは31名、その中で有効回答数は29名であった。回答を得られた児童の年齢は13～16歳であり、有効回答数の入所児童平均年齢は14.2±1.9歳であった。入所群の入所期間は1ヶ月以内～1年10ヶ月であり、平均期間は8.3±5.9ヶ月であった。

対照群は、入所群の平均年齢に基づいて中学2年生を対照とした。都内の公立中学校の校長、教頭、2年生担任教諭の了承を得て同校の2年生男子42名に質問紙調査を実施した。42名中、回答を得られたのは42名、有効回答数は40名であった。

児童自立支援施設入所児童では施設職員、一般中学生男子では担任教諭が調査用紙を配布し、内容について説明を行い回収した。尚、調査時期は両者共に2009年10月に実施し回収したものである。

2. 調査項目

調査項目としては入所群では年齢を調査し、入所群・対照群ともソーシャルサポート尺度と向社会的行動尺度の点数を調査した。

「向社会的行動」尺度の点数について、横塚による¹⁹⁾向社会的行動尺度(中高生版)を用いて測定した。「向社会的行動尺度」は、「家族を相手とした向社会的行動」、「友人への行動援助」、「寄付や奉仕に関わる項目」、「友人への学習面での援助」、「友人への心理的援助」の5因子20項目で構成されている。それぞれの項目に対して、「やったことない」、「一度やった」、「数回やった」、「しばしばやった」、「いつもやった」の5段階で評定を求めるものである。得点が高い程、向社会的行動を行っていると考えられる。

「ソーシャルサポート」尺度は、中学生用ソーシャルサポート尺度²⁰⁾を用いて測定した。中学生用ソーシャルサポート尺度は、「両親」「友達」「先生(教諭)」のサポート源(各4項目、全12項目)について、それぞれ4段階「ちがうと思う」「たぶんちがうと思う」「たぶんそうだと思う」「きっとそうだと思う」で評定を求めるものである。評定方法は中学生による自己評定であった。ソーシャルサポートでは得点が高い程、サポートを受けているとされる。

3. 分析方法

「向社会的行動」尺度の点数において因子分析を行い、抽出された「手助け・気遣いの援助行動」、「日常の援助行動」の2因子について、合計得点を算出した。得点化は、「やったことない」1点、「一度やった」2点、「数回やった」3点、「しばしばやった」4点、「いつもやった」5点とした。

「ソーシャルサポート」尺度では、児童の倫理的配慮により「父親」と「母親」のサポート源を「両親」とし、「友達」、「先生(教諭)」との3つの下位尺度について合計得点を算出した。得点化は、「ちがうと思う」1点、「たぶんちがうと思う」2点、「たぶんそうだと思う」3点、「きっとそうだと思う」4点とした。

「ソーシャルサポート」尺度と「向社会的行動」尺度の点数について入所群と対照群の群間の統計的な差を検出するためにマン・ホイットニー検定を行い、さらに向社会的行動尺度とソーシャルサポート尺度の高さに統計的に有意な関連がみられるかどうか調べるため回帰分析を行った。

統計処理にはPASW18.0 for Windowsを使用し、統計的な有意水準は以下特別に明言しない場合は $p<.05$ とした。

4. 倫理的配慮

本研究は、国際医療福祉大学大学院倫理委員会にて承認を得ている。実施にあたっては、施設職員や中学校教諭に目的・趣旨・方法を説明し、調査協力の同意を得た。対象者及び対照者には、回答者の匿名性が保

護されること、回答は自由意思によること、研究参加を承諾した後も途中で中断できること、回答を拒否することで不利益は生じないこと、希望があれば調査結果をフィードバックすることを職員や担任教諭を通して口頭で説明し、書面にも記載した。回答の提出を持って調査協力の同意とみなした。

III. 結果

1. 向社会的行動尺度の信頼性の確認

向社会的行動尺度の全20項目について、平均値及び標準偏差を算出した(表1-1)。斜体は天井効果およびフロア効果が見られたため省略した項目を示す。ここで天井効果およびフロア効果の見られた「歳末の助け合いをした」「まわりの人に元気に挨拶をしたり話かけたりした」「バザーや廃品回収に協力した」「休んだ友達にノートを貸した」「友だちに勉強を教えてやった」など5項目を分析から除外し、残りの15項目に対し主因子法による因子分析を行った(表1-2、図1)。固有値の変化により、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して最尤法・バリマックス回転法による因子分析を行った(表1-3)。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった「インドやアフリカを助ける募金に協力した」の1項目を分析から除外し、表1-3の斜体で示した全14項目にて再度最尤法・バリマックス回転法による分析を行った。これにより得られた因子間相関を表1-4に示す。

第1因子は9項目で構成されており、「友だちがけがをしたり、病気の時、手当てをした。」「家族のものがぐあいの悪いとき、看病した。」など、相手が悩んだりしたときの手助けや気遣いの援助とした内容が多かった。そこで「手助け・気遣いの援助行動」因子と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「母親の手伝いをした。」「家の掃除や片付けをした。」など、日常にある援助の内容が多かった。そこで「日常の援助行動」因子と命名した。

信頼性を検討するために、下位因子ごとにcronbachの α 係数を算出したところ、第1因子.89、第2因子.83

表 1-1 向社会的行動尺度の平均値と標準偏差

	全体	入所群	対照群
	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)
(8)まわりの人に元気に挨拶をしたり、話しかけたりした.	3.66 (1.34)	3.67 (1.42)	3.66 (1.30)
(18)家の掃除や片付けをした.	3.56 (1.34)	3.77 (1.28)	3.41 (1.38)
(12)母親の手伝いをした.	3.38 (1.27)	3.43 (1.33)	3.34 (1.24)
(20)ゲームやスポーツのルールを教えてやった.	3.37 (1.40)	3.77 (1.38)	3.07 (1.35)
(10)家族のためにお風呂をわかしてやった.	3.30 (1.40)	3.37 (1.40)	3.25 (1.43)
(4)友だちの荷物を持ってやったり、傘に入れてやった.	3.23 (1.33)	3.03 (1.48)	3.37 (1.22)
(13)兄弟(姉妹)が困っているとき、手をかしてやった.	3.03 (1.40)	3.27 (1.44)	2.85 (1.40)
(9)苦しい立場にある友だちを親身になって助けた.	3.00 (1.41)	3.23 (1.50)	2.83 (1.34)
(5)家族のお祝いの日や誕生日などにプレゼントをした.	2.99 (1.30)	3.07 (1.41)	2.93 (1.23)
(3)コーヒーやお茶を入れて家族をいたわった.	2.94 (1.40)	2.70 (1.39)	3.12 (1.40)
(11)インドやアフリカを助ける募金に協力した.	2.83 (1.36)	2.97 (1.38)	2.73 (1.36)
(1)家族のものがぐあいの悪いとき、看病した.	2.87 (1.39)	2.80 (1.56)	2.93 (1.27)
(14)友だちの悩みを聞いてやったり相談相手になった.	2.70 (1.52)	3.27 (1.57)	2.29 (1.35)
(6)家族のために部屋を暖かくした.	2.61 (1.45)	2.57 (1.48)	2.63 (1.44)
(2)友だちがけがをしたり、病気の時、手当てをした.	2.65 (1.33)	2.67 (1.47)	2.63 (1.24)
(19)他人の失敗を笑ったりしないで励ましてやった.	2.76 (1.30)	2.93 (1.39)	2.63 (1.24)
(7)歳末助け合いに協力した.	2.35 (1.41)	2.60 (1.57)	2.17 (1.28)
(15)休んだ友達にノートを貸した.	2.35 (1.45)	2.30 (1.53)	2.39 (1.39)
(16)友だちに勉強を教えてやった.	2.24 (1.34)	2.17 (1.37)	2.29 (1.33)
(17)バザーや廃品回収に協力した.	2.04 (1.39)	2.57 (1.61)	1.66 (1.06)

表 1-2 向社会的行動尺度の因子分析(主因子・回転なし)

	因子		共通性
	1	2	
(1)家族のものがぐあいの悪いとき、看病した.	0.76	-0.26	0.65
(2)友だちがけがをしたり、病気の時、手当てをした.	0.76	-0.36	0.71
(14)友だちの悩みを聞いてやったり相談相手になった.	0.75	-0.06	0.57
(9)苦しい立場にある友だちを親身になって助けた.	0.75	-0.13	0.58
(13)兄弟姉妹が困っているとき、手をかしてやった.	0.73	0.13	0.55
(20)ゲームやスポーツのルールを教えてやった.	0.70	0.27	0.56
(19)他人の失敗を笑ったりしないで励ましてやった.	0.69	-0.11	0.49
(12)母親の手伝いをした.	0.68	0.55	0.77
(3)コーヒーやお茶を入れて家族をいたわった.	0.66	-0.08	0.44
(6)家族のために部屋を暖かくした.	0.64	-0.10	0.42
(11)インドやアフリカを助ける募金に協力した.	0.58	0.07	0.34
(10)家族のためにお風呂をわかしてやった.	0.57	0.30	0.34
(4)友だちの荷物を持ってやったり、傘に入れてやった.	0.56	-0.23	0.36
(18)家の掃除や片付けをした.	0.55	0.35	0.42
(5)家族のお祝いの日や誕生日などにプレゼントをした.	0.54	-0.24	0.35

という値が得られ、内的整合性の高さが確認された。

2. ソーシャルサポートの信頼性の確認

ソーシャルサポート尺度の信頼性を確認するために、cronbachのα係数を算出した(表1-5)。ソーシャル

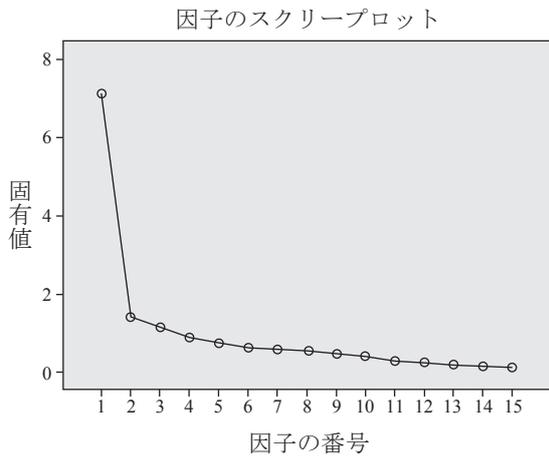


図1 向社会的行動尺度のスクリープロット

サポートの「両親」の4項目を算出したところ.95であった。「友達」では.95,「先生」では.94であり、すべての項目で内的整合性の高さが確認された。

3. 入所群と対照群の比較

入所群と対照群で得られたソーシャルサポート尺度の得点の度数分布を表2-1に、グラフを図2-1に示す。両群間ではいずれのソーシャルサポートにおいても有意な差がみられた(マン・ホイットニー検定, (両親)U=379, P=.014, (友達)U=351, P=.005, (先生)U=226, P=.000)。ソーシャルサポートにおいて、入所群は対照群より有意に高い得点であることが示された。

次に向社会的行動尺度の2つの因子の得点の度数分布を表2-2に、グラフを図2-2に示す。両群間では2つの因子とも有意な差はなかった(マン・ホイットニー検定, (手助け・気遣いの援助行動)U=570, P=.770, (日常の援助行動)U=499, P=.229)。

表 1-3 向社会的行動尺度の因子分析初期解 (最尤法・バリマックス回転)

	因子		共通性
	1	2	
(2)友だちがけがをしたり, 病気の時, 手当てをした.	.82	.17	.70
(9)苦しい立場にある友だちを親身になって助けた.	.75	.28	.64
(14)友だちの悩みを聞いてやったり相談相手になった.	.72	.33	.63
(19)他人の失敗を笑ったりしないで励ましてやった.	.69	.27	.55
(1)家族のものがぐあいの悪いとき, 看病した.	.66	.37	.57
(3)コーヒーやお茶を入れて家族をいたわった.	.54	.35	.42
(6)家族のために部屋を暖かくした.	.54	.28	.38
(4)友だちの荷物を持ってやったり, 傘に入れてやった.	.52	.24	.33
(5)家族のお祝いの日や誕生日などにプレゼントをした.	.51	.17	.29
(11)インドやアフリカを助ける募金に協力した.	.42	.38	.31
(12)母親の手伝いをした.	.17	.94	.90
(10)家族のためにお風呂をわかしてやった.	.26	.63	.46
(18)家の掃除や片付けをした.	.26	.57	.39
(13)兄弟姉妹が困っているとき, 手をかしてやった.	.51	.55	.56
(20)ゲームやスポーツのルールを教えてやった.	.45	.53	.49
因子寄与率	4.59	3.04	7.63
寄与率	30.57	20.30	50.87

表 1-4 向社会的行動尺度の因子分析最終解 (最尤法・バリマックス回転)

質問項目	因子		共通性
	1	2	
第1因子「手助け・気遣いの援助行動」			
(2)友だちがけがをしたり, 病気の時, 手当てをした.	.82	.17	.71
(9)苦しい立場にある友だちを親身になって助けた.	.76	.28	.60
(14)友だちの悩みを聞いてやったり相談相手になった.	.72	.32	.56
(19)他人の失敗を笑ったりしないで励ましてやった.	.68	.27	.49
(1)家族のものがぐあいの悪いとき, 看病した.	.66	.36	.64
(3)コーヒーやお茶を入れて家族をいたわった.	.54	.34	.43
(6)家族のために部屋を暖かくした.	.54	.27	.40
(4)友だちの荷物を持ってやったり, 傘に入れてやった.	.52	.25	.36
(5)家族のお祝いの日や誕生日などにプレゼントをした.	.51	.17	.35
第2因子「日常の援助行動」			
(12)母親の手伝いをした.	.17	.95	.78
(10)家族のためにお風呂をわかしてやった.	.26	.62	.43
(18)家の掃除や片付けをした.	.26	.56	.43
(13)兄弟(姉妹)が困っているとき, 手をかしてやった.	.51	.55	.55
(20)ゲームやスポーツのルールを教えてやった.	.45	.52	.53
項目の α 係数	.89	.83	
因子寄与率	4.42	2.86	7.28
寄与率	31.56	20.46	52.02

表 1-5 両親・先生・友達のソーシャルサポート尺度における質問項目間の相関係数

両親のソーシャルサポート($\alpha=.95$)	1	2	3	4
(1)あなたに元気がないと, すぐ気づいて, はげましてくれる.	—	.84**	.75**	.83**
(2)あなたが何か失敗をしても, そっと助けてくれる.		—	.80**	.91**
(3)ふだんからあなたの気持ちをよくわかってくれる.			—	.85**
(4)あなたが何かやっていると知ったらどうしたらよいか教えてくれる.				—
友達のソーシャルサポート($\alpha=.95$)	1	2	3	4
(1)あなたに元気がないと, すぐ気づいて, はげましてくれる.	—	.86**	.77**	.79**
(2)あなたが何か失敗をしても, そっと助けてくれる.		—	.78**	.88**
(3)ふだんからあなたの気持ちをよくわかってくれる.			—	.77**
(4)あなたが何かやっていると知ったらどうしたらよいか教えてくれる.				—
先生のソーシャルサポート($\alpha=.94$)	1	2	3	4
(1)あなたに元気がないと, すぐ気づいて, はげましてくれる.	—	.80**	.72**	.82**
(2)あなたが何か失敗をしても, そっと助けてくれる.		—	.77**	.83**
(3)ふだんからあなたの気持ちをよくわかってくれる.			—	.79**
(4)あなたが何かやっていると知ったらどうしたらよいか教えてくれる.				—

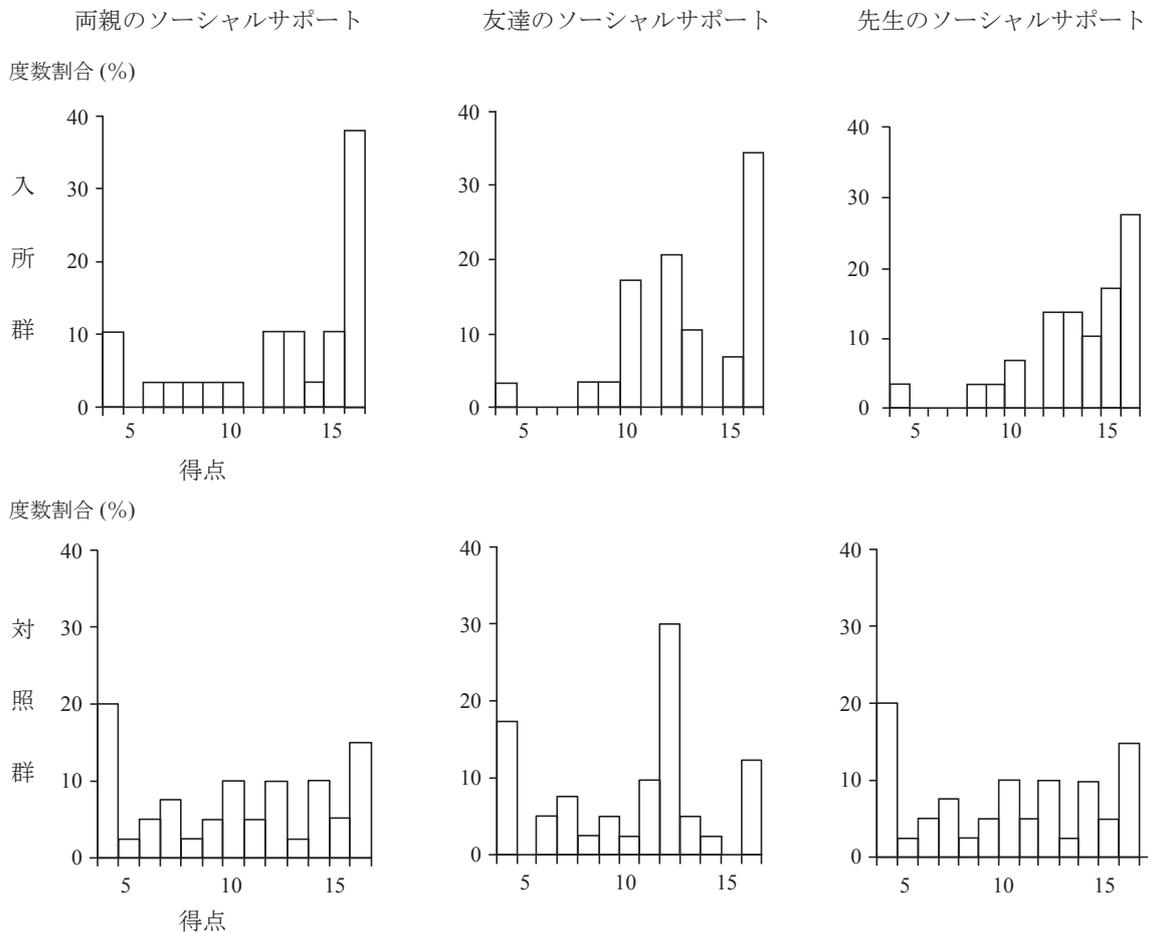
** $p<0.1$

表 2-1 ソーシャルサポート尺度得点の度数分布表

階級	度数					
	両親		友達		先生	
	入所群	対照群	入所群	対照群	入所群	対照群
4	3	8	1	0	1	9
5	0	1	0	7	0	1
6	1	2	0	2	0	1
7	1	3	0	3	0	3
8	1	1	1	1	1	2
9	1	2	1	2	1	2
10	1	4	5	1	2	6
11	0	3	0	4	0	4
12	3	4	6	12	4	6
13	3	2	3	2	4	0
14	1	3	0	1	3	2
15	3	1	2	0	5	1
16	11	6	10	5	8	3
計	29	40	29	40	29	40

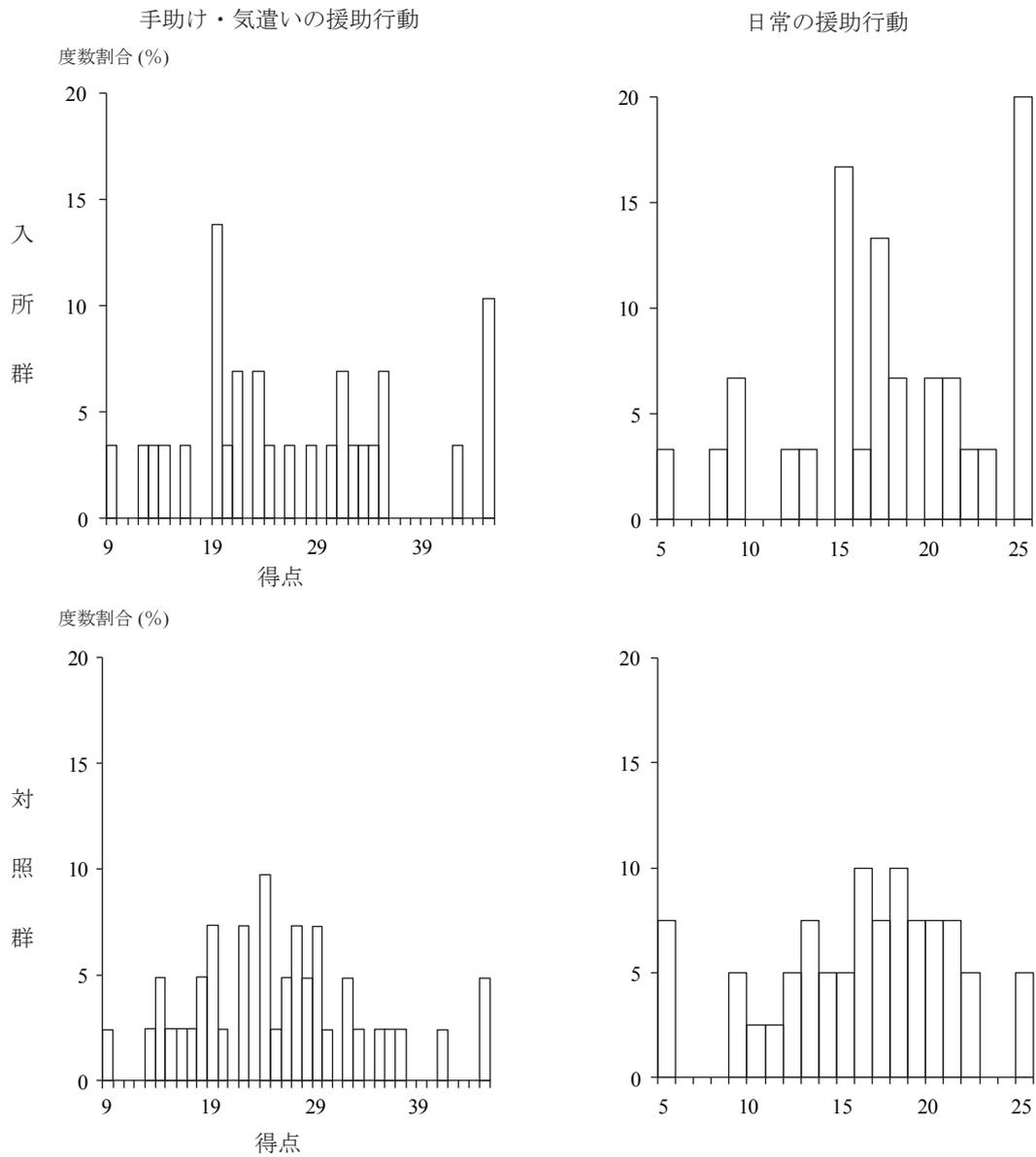
表 2-2 向社会的行動尺度得点の度数分布表

階級	度数		階級	度数	
	手助け・気遣いの援助行動			日常の援助行動	
	入所群	対照群		入所群	対照群
9~11	1	1	5	1	3
12~16	4	5	6~7	0	0
17~21	7	7	8~9	3	2
22~26	4	10	10~11	0	2
27~31	4	9	12~13	2	5
32~36	5	5	14~15	5	4
37~41	0	2	16~17	5	7
42~46	4	1	18~19	2	7
			20~21	4	6
			22~23	2	2
			24~25	5	2
計	29	40	計	29	40



ソーシャルサポート	両親	友達	先生
入所群の平均値 ±2×(標準偏差)	3.09±2.06	3.36±1.52	3.37±1.54
対照群の平均値 ±2×(標準偏差)	2.52±2.08	2.52±1.98	2.34±2.04
マンホイットニー検定の U 値	U=379	U=351	U=226
P 値	P=.014	P=.005	P=.000

図 2-1 ソーシャルサポート尺度得点の度数分布グラフ



向社会的行動	日常の援助行動	手助け・気遣いの援助行動
入所群の平均値 $\pm 2 \times$ (標準偏差)	2.93 \pm 2.26	3.52 \pm 2.22
対照群の平均値 $\pm 2 \times$ (標準偏差)	2.82 \pm 1.86	3.19 \pm 2.00
マンホイットニー検定の U 値	U=570	U=499
P 値	P=.770	P=.229

図 2-2 向社会的行動尺度得点の度数分布グラフ

4. ソーシャルサポート尺度と向社会的行動尺度の関連

ソーシャルサポート尺度と向社会的行動尺度の高さに統計的に有意な関連がみられるかどうか調べ

るため、入所群と対照群で横軸をソーシャルサポート尺度の点数、縦軸を向社会的行動尺度の点数として回帰分析を行った(図3). その結果、対照群では回帰直線の傾き=0の帰無仮説は棄却されたが(手助

け・気遣いの援助行動)両親 $a=1.03 \pm .55^{**}$, 友達 $a=.97 \pm .64^{**}$, 先生 $a=1.20 \pm .61^{***}$, (日常の援助行動), 両親 $a=.49 \pm .15^{**}$, 友達 $a=.57 \pm .38^{**}$, 先生 $a=.65 \pm .36^{**}$ ($^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$), 入所群の回帰直線の傾き $=0$ という帰無仮説は棄却されなかった((手助け・気遣いの援助行動)両親 $a=.46 \pm .94$, 友達 $a=.99 \pm 1.25$, 先生 $a=.21 \pm 1.39$, (日常の援助行動), 両親 $a=.41 \pm .47$, 友達 $a=.25 \pm .66$, 先生 $a=.27 \pm .65$).

入所群ではソーシャルサポート尺度の得点の高低は向社会的行動尺度の得点の高低と関連がみられなかったが, 対照群ではソーシャルサポート尺度の高低は向社会的行動尺度の高低と有意な関連があることが示された.

IV. 考察

本研究では, 児童自立支援施設の入所児童(入所群)と一般中学生(対照群)を対象とし①ソーシャルサポートの比較と②ソーシャルサポートと向社会的行動の関連性の有無を検討することを目的とした.

まず, ソーシャルサポートは入所群の方が対照群より高くサポートを感じていた. 対照群のソーシャルサポートの平均値では(両親: 2.52 ± 1.04 , 友達: $2.52 \pm .99$, 先生: 2.34 ± 1.02), 中学生を対象とする先行研究と比べて同程度であったので(父親: $2.77 \pm .73$, 母親: $2.90 \pm .68$, 友人: $2.91 \pm .91$, 教師: $2.56 \pm .77$)¹⁰⁾, 児童自立支援施設入所児童のソーシャルサポートが一般中学生より有意に高かったと言える結果であった.

これは, 下記3点のことが予測できる. 第1に児童自立支援施設の長は, 施設に入所中の児童を就学させなければならないとされている(児童福祉法第48条). 児童自立支援施設に併設された学校では勉強面でも少人数で先生から指導してもらえることやその児童に合った教育が受けられるため, 施設入所前は学習が苦手であった児童も学力の向上がみられる²⁾. このようにして施設に入所していることで先生からの高いサポートを得ることにつながっているという事が考えられる. 第2として, 友達関係においては寮生活の中で少人数での集団生活を行い同

じ生活を行っている事や, 境遇が似ていることが考えられ友達を身近に感じているのかもしれない. そのことが, 友達からの高いソーシャルサポートを得られることにつながっているのかもしれない. 第3は, 両親(親)について, 施設職員は, 子育ての姿勢や態度を責めるような関わり方をせず, 協力して子どもの自立を支え援助するために「連携」を図っている²⁾. 恵まれない環境で育ってきた児童もいるが職員との関係から大人への不信感軽減が見られ²⁾, 親と離れて暮らすことや起こっていた事象から離れたことで改めて親からのサポートに気づける事があるのかもしれない.

そのように入所群では対照群より有意にソーシャルサポートが高かったにもかかわらず, 両群間で向社会的行動の多さに有意な差は見られなかった. ただしこれはソーシャルサポートの平均値と向社会的行動の平均値で関連を検討した結果である. そこでソーシャルサポートの強さと向社会的行動の多さの比例的関連性の有無を検討することが必要になった.

そのために行った回帰分析の結果, 対照群では, 両親, 友達, 先生の全ての項目においてソーシャルサポートを高く感じているものは, 向社会的行動を多く行うと回答したことが明らかとなった. 先行研究では, 小学校1年生から5年生を対象とした児童期の研究にてソーシャルサポートを高く認知している子どもの方が, 向社会的性が高いことが明らかになっており^{17,18)}, 対照群である一般中学生でも同じ結果が示されたと言える. また, 一般中学生は, 向社会的行動の「手助け・気遣いの援助行動」において, 両親や先生のソーシャルサポートの高さと向社会的行動の高さの回帰直線の傾きの値の99%信頼区間が0以上で(両親 $a=1.03 \pm .55$, 先生 $a=1.20 \pm .61$)あった. 身近な大人からソーシャルサポートを得ていると感じていることが, 向社会的行動を行うことに繋がるのかもしれない. 一般中学生では親や教師のソーシャルサポートを感じていることが問題行動の低減に繋がることが示されているため^{8,10,11)}, 親や教師によるソーシャルサポートの提供の強化により, 反社会的行動のような問題行動を低減さ

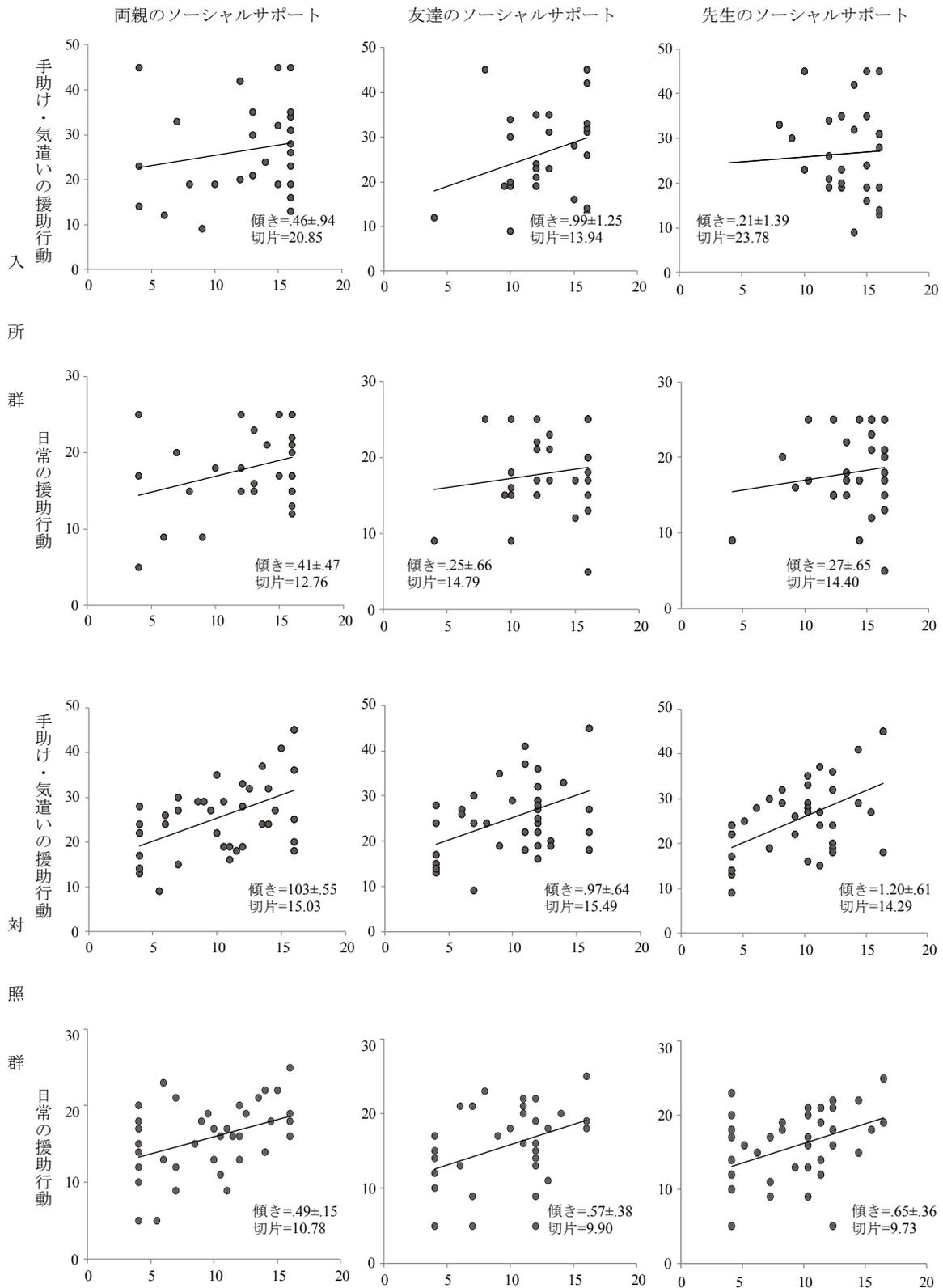


図3 向社会的行動尺度とソーシャルサポート尺度の回帰直線と散布図

せ、そして向社会的行動の増加をみるのが可能と言えるかもしれない。

しかし、入所群では、ソーシャルサポートの高さは向社会的行動の多さに関連していなかった。これについては①児童期(小学生)の研究において学年が低いほどソーシャルサポートは高く向社会性に影響することも示されている¹⁷⁾。②5歳児から9歳児を対象とした研究では、向社会性の価値観と効力感が質的に変化することが明らかにされており、発達的な変化が示されている²¹⁾。③全国の児童自立支援施設では被虐待児が多いことが報告されており²²⁾、劣悪な環境で育ってきた非行少年が多い。①-③を合わせると、幼少期に受けていたソーシャルサポートが不十分だった児童が、思春期近くになり新たにソーシャルサポートを高く感じても、すぐに向社会的行動を多く行うことになりにくいかもしれない。また、入所群では、実際に離れているはずの両親からのソーシャルサポートも高く回答しており、もしも「こうだったらいい」といった願望が込められた可能性も考えられる。それも、入所群でソーシャルサポートの高さと向社会的行動の多さの比例的関連性がみられなかった理由の一つである可能性がある。

先行研究から、ソーシャルサポートを高く感じている児童は向社会的行動を多くとると同時に反社会的行動が少ないことが考えられたが、今回はソーシャルサポートを高く感じている一般中学生も向社会的行動を多くとることが示された。一般中学生の問題行動の軽減にはソーシャルサポートの強化は有効であることが知られている^{10,11)}。従って問題行動低減の戦略として、ソーシャルサポートを高め、その効果を向社会的行動の増加でみるという方法は一般中学生では成立可能と思われた。

しかし一方で今回児童自立支援施設の入所児では、入所後からソーシャルサポートを高く感じ始めても、向社会的行動のような自発的な援助行動をより多く行う事に繋げることは困難である可能性が示唆された。問題行動が軽減していないことも既述の通りである。

したがって児童自立支援施設の入所児の問題行動

の軽減の戦略としてはソーシャルサポートの強化以外の手段を考えていく必要があると考えられた。

VI. 今後の課題

ソーシャルサポート以外の戦略としては例えば、ソーシャルサポートの不足以外に由来するであろうストレスへの対処、発達障害や精神障害への介入、考察にあった「願望」の部分を実際のものにするには、家庭環境を回復し、失った過去の家族のソーシャルサポートを取り戻し、今後の家族のソーシャルサポートも獲得するという事も大きな課題といえるだろう。この他にも入所児たちが現在抱える問題を網羅しサポート体制を考えなければならないだろう。

今後の課題について①データ数が少ないことが挙げられる。しかし、児童自立施設入所児童という対象者の特性を考慮するとデータ収集には制限があり本研究のデータをもってしても十分貴重なものであるといえるだろう。②男子群のデータのみ分析結果になっているが、今後女子群のデータも解析し男子群と比較したり、そのデータを加えることで今回得られた結果との異同を論じることが必要な可能性がある。

これら点については今後の研究課題とし、本研究より対象者数及び対照者数を増やし調査を行うこと、質問紙の信頼性・妥当性を再検討し、対象者にあった適切な質問紙を検討すること等、さらなる詳細な研究を進めていきたい。

謝辞

本研究の実施に際して、富田拓先生から、御助言、御指摘を頂きました。データ収集では児童自立支援施設職員の方々や施設入所児童に多大な御協力を頂きました。同期生の中込郷子先生、中学校教諭の菅原幸子先生、担任の先生方や中学生生徒達に多大な御協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

文献

- 1) 警視庁生活安全局少年課. 2012. 非行の概要.
http://www.npa.go.jp/toukei/index.htm 2012.3.15
 - 2) 東京都福祉保健局. 2005. 東京の児童相談所における非行相談と児童自立支援施設の現状-子どもの健全育成と立ち直り支援の取組-. http://www.metro.tokyo.jp/index.htm 2012.3.15
 - 3) 富田拓, 十一元三. 反社会的問題行動を示す子どもたちへの支援. 司会のことば. 児童青年精神医学とその近接領域 2007; 48(3): 323-324
 - 4) 吉岡裕美. 問題行動とその対応についての試論:反社会的問題行動と非社会的問題行動(平成16年度〔昭和学院短期大学〕学生研究レポートより). 昭和学院短期大学生活科学誌 2005; (16): 27-34
 - 5) 前田信一. 児童自立支援施設のあり方. こども教育宝仙大学紀要 2011; 2: 69-76
 - 6) 岩田美香. 児童自立支援施設入所児童の社会的ネットワーク-少年院生との比較分析-. 現代福祉研究 2011; (11): 223-240
 - 7) Hawkins J.D., Weis J.G.. The social development model: An integrated approach to delinquency prevention. Journal of Primary Prevention 1985; 6: 73-97
 - 8) Rutter, M. Protective factor in children's responses to stress and disadvantage. In M.W.Kents&J.E.Rolf(Eds). Primary prevention of psychopathology: vol.3 Social competence in Children. London: University Press of England, 1979: 44-74
 - 9) Cobb, S. Social support as a mediator of life stress. Psychosomatic Medicine 1976; 38: 300-314
 - 10) 鈴木公基, 植村みゆき. 中学生の物質使用にソーシャルサポートが与える影響. 関東学院大学人間環境学会紀要 2008-09; (10): 17-32
 - 11) 鈴木公基, 桜井茂男. 中学生の問題行動に与えるソーシャルサポートおよび仲間志向性の影響. 日本教育心理学会総会発表論文集. 2001; (43): 527
 - 12) Mussen P, Eisenberg-berg N(菊池章夫訳). The roots of caring, sharing, and helping. San Francisco:freeman. 1977. 思いやりの発達心理. 東京: 金子書房, 1980
 - 13) 非行・犯罪研究と向社会的行動研究の接点を探して(日本犯罪心理学会第35回大会発表論文集); (ラウンドテーブル・ディスカッション). 犯罪心理学研究 1997; 35(特別号): 146-147
 - 14) 中川知宏, 斎藤綾香. 仲間からの拒絶経験と将来展望が非行および向社会的行動に及ぼす効果. 東北福祉大学研究紀要 2007; 31: 221-233
 - 15) 法務省法務総合研究所. 平成17年版 犯罪白書-非行少年-. 国立印刷局. 2005
 - 16) 尾関美喜, 朴賢晶, 中島誠ら. 社会環境が社会的行動に及ぼす影響(8): 中学生による向社会的行動と迷惑行為に着目して. 日本教育心理学会総会発表論文集 2007; (49): 664
 - 17) 渡辺弥生. 児童期における家庭のソーシャルサポートが家庭及び学校の社会的スキルに与える影響について. 法政大学文学部紀要 2002; (48): 203-220
 - 18) 嘉数朝子, 砂川裕子, 井上厚. 児童のストレスに影響を及ぼす要因についての検討; ソーシャルサポート対処行動. 琉球大学教育学部紀要 2000; (56): 343-358
 - 19) 横塚怜子. 向社会的行動尺度(中高生版)作成の試み. 教育心理学研究 1989; 37(2): 158-162
 - 20) 岡安孝弘, 嶋田洋徳, 坂野雄二. 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果. 教育心理学研究 1993; 41(3): 302-312
 - 21) 伊藤順子. 向社会性についての認知はいかに変容するのか: 幼児期から児童期にかけての検討. 幼年教育研究年報 2008; 30: 5-13
 - 22) 国立武蔵野学院. 児童自立支援施設入所児童の被虐待経験に関する研究. 埼玉: 国立武蔵野学院, 2002
- 注)本論文は、2009年度修士課程論文のデータを元に、分析したものである。